

オーストラリアに来て早くも半年になります。半年というと、ちょうど日本とは異なる環境にも慣れ、最初の頃目新しく映った街並みや植生の違いもいつの間にか日常の一部になり、たいていのことは驚かないようになってゆく時期です。そんな中でも、わたしにとっていつまでも慣れない、驚かされることがあります。それは語学学校へ登校中に車窓から見る、ある景色です。

わたしの住んでいる町 **Fremantle** は、古くは開拓時代にさかのぼる港町です。毎朝わたしは修道院のミサが終わるや否や、荷物を持ってバスを拾って駅に向かいます。**Fremantle** の駅からは、わたしの学校がある **Perth** への上りしか電車がありません。電車に乗ると、わたしは必ず進行方向に向かって右側の席に座ります。わたしばかりでなく、他の多くの乗客もそのように座り、すぐに右側の座席だけ一杯になります。その訳はすぐにわかります。

電車がプラットホームを後にすると、すぐに車窓から目前に飛び込んでくるのは、大きな港です。停泊しているフェリーやタンカー、そしてそれらの荷物を釣り上げる、まるでキリンのような形をした巨大なクレーン。港の駐車場には、日本から届けられた新車が一分の狂いもなく整列し、太陽を浴びてきらきら光っています。時には遠くヨーロッパからの豪華客船が寄港し、船の各階の乗客の姿が見えることもあります。

電車が動き出すと港はやがて姿を消してしまい、海は湾岸倉庫や家々に隠れてしまいます。わたしはそこでたいてい一旦眼を車窓から離し、持ってきた本を手に読み始めます。けれども熱中して読むことはできません。なぜならものの十分も過ぎないころ、電車は驚くような景色をわたしに見せてくれるからです。海辺に建てられたしゃれたマンションや家々を抜けると、突然景色が開け、果てしないインド洋が突然目前に広がります。わたしはしばらく本から目を離して、その景色に見とれます。

晴れの日のお海の色は、ライトブルーから深い藍色まで、さまざまなグラデーションを伴って見えます。時にはまぶしい光を反射し、水平線まではっきり見えることもあれば、ぼんやりとかすんで見えることもあります。わたしは雨や曇りの海も好きです。厚い雲と深い灰色の海が、はるか水平線で一つになり、白い無数の波が変化を与えている様子は、見ている飽きることはありません。

電車が海を見せてくれるのは、おそらく五分足らずだと思います。それでも、いきなり開ける途方もない海の広がり、わたしはいつまでも慣れることができません。その全容を決して見通すことのできない海の広さに圧倒されると同時に、いつも心のうちに浮かんでくる聖書の一節があります。「大水もその愛を消すことはできない」—雅歌の言葉です。

たとえ世界中の海の水を集めたとしても、神の燃え上がる愛を消すことはできません。神の愛は海よりも広く深く果てしなく、限界がないからです。この神の途方もない愛の広がりの中にわたしたちは抱かれていると同時に、その愛がわたしたち一人一人の小さな心に注がれています。それはわたしにとって途方もない神秘です。つまり、わたしたちの

心は、限界のない神の愛を受け入れるほどに広いのです。車窓から広がる海を見るたびに、わたしは自分の心の「内なる海」を思い起こし、そのことに驚かされるのです。



オーストラリアにて シスター岸 里実